

## 無人駅

あまり人のいない駅の写真が撮りたくて、甲府から中央本線の下り各駅電車に乗った。いくつかの駅で降りてみたが、撮ってみようという気持ちにならずに、また次の電車に乗るということを何回か繰り返してこの駅についた。

ひとつのホームに上りと下りの電車が停車する小さな駅である。私のほかには誰もいない。初夏の日差しが降り注ぐ、ちょうど昼の時間帯であった。ホームから階段を上ると改札がある。改札といっても小さな簡易改札機があるだけだ。外に出ると、駅の周りは人の気配がまったくくない。近くには民家が見える。看板があつて、近くに歴史的な名所がいくつかあると書かれていている。

上からホームを見下ろしていると、誰もいないホームにアナウンスが流れ、上りの特急列車が通過していった。その後、しばらくして上りの各駅電車がホームに停車したが、誰も降りることはなかった。私は階段を下りてホームにもどり写真を撮ることにした。改札のあたりやホームはともきれいに掃除がされていて、ごみひとつ落ちていない。ホームの端のほうに行くと、三〇センチほどの草が茂っていた。

誰もいない駅の写真を撮っていると、下りの特急電車が一本通過したあと、下りの各駅電車がホームに入ってきた。停車した電車とホームに向かってシャッターを切っていると、二人の人が降りてきた。一人は若い女性でもう一人は四歳か五歳くらいの子どもだった。

手をつないで降りてきた二人は、ホームに立って電車を見ていた。

次に、いま自分たちが降りた人のいない扉のあたりに向かつて、ごく自然に二人で一緒に頭を下げたのだった。扉が閉まり、電車は二人に見送られるように出発していった。私はシャッターを切ることを忘れてその様子に見入ってしまった。

この日、一時間すこしのあいだこの駅にいたのだが、その間に駅を利用したのはこの二人と私の三人であった。東京には一日の乗降客が二百万人を超えるような駅がいくつもあるが、この駅は一日に何人の人が利用しているのだろうか。先ほどの二人がしたように、この駅を利用する人たちは、電車に頭を下げて見送るのだろうか。

また一人になってしまった無人の駅で、そんなことを考えた。そして、次の下り電車に乗って駅をあとにすることにした。